
やみ喰い ~病院~

ミドリのヒト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やみ喰い～病院～

【Zコード】

Z2837G

【作者名】 ヒナプロジェクト

【あらすじ】

ごく普通の成人男性で独身である南咲洋平。新聞記者である彼はいつも通りの生活の中、仕事に向かった矢先突然の事故に遭う。気がつけばそこは病院の一室。しかし、この場所の何かがおかしな事を彼は直感的に感じ取るが遠くの方から誰かの泣き声が聞こえて・・・。弱気な新聞記者とそれ支える心強い少女が描く小さなサバイバルホラー。目指す目的は病院からの脱出と、少女、藤咲里枝の母親を探すことに・・・。

プロローグ（前書き）

連載中の作品が終わる前に新しいものができました。どうぞ、御ゆ
るひと・・・。

プロローグ

初夏。

地面に無駄なく敷き詰められたアスファルトを容赦のない太陽光線が一直線に走っている。水気を失ったアスファルトはもうこれ以上乾かせるものもないのか、ガス漏れのサインの様に、鼻や喉もとにツンとくるあの特有の臭いを縦横無尽に発している。古くなつて割れだしたその隙間にも、からからに乾いたアスファルトの欠片や砂が無造作に入り混じっているだけだ。人工の造物がすらりと敷き詰められた先に何かが少しだけ浮き出ているのが観てとれた。

ちりちりと乾いた音と出して、焼いた鉄板の様なマンホールに視線がはしる。

「オスイ」と書かれていた。おそらく、下水道のパイプに直接繫がつてるものだろう。それ自体の大きさも中ほどである。だが、汚水の異臭は漂つてこないことなら、このマンホールはしっかりと管理されているのだろう。まさにその通りだつた。私がよく目を凝らせば、そこには「Tケン」細かく刻印が打つてあつたからだ。健が管轄としているのは当たり前だと、私はその時になつてそう思った。視線は再び下から上に変わりを見せる。

白くて丸くぼやけた眩しい太陽が、私に大きく顔を見せているようを見えた。

太陽の周りに、遮る者などいない。私と太陽と通る一本線にさえ、何の障害物も見当たらないからだ。雲も屋根も、日傘さえも。もつとも、私は日傘をさすよつた上品な感情など持つてはいないのは確かなのだが・・・。

近くに公園もあるのだろうか。蝉の声がひとりわざと泣きわめいていた。夏に蝉。この二つの組み合わせはいつの間にか常識になつていて。静かな夏が来たとき、人はどうするのだろうかと、私は無駄な思考を頭の中でひとしきり描き、今の仕事に戻ることにし

た。尻ポケットに入っているハンカチを取り出し、額の無数に浮き出た汗をさつとふき取る。これで五枚目だ。私は仕方がないような表情で汗でべとべとになったハンカチを無造作に元の場所にしまいながら思つた。この夏季に入る2週間前から私は異様な汗をかき始めるといつたみょうちくりんな病気を持っていた。いや、病気と断定するのはまだ早すぎるかと思うが、私はそうとらえていた方が楽だった。なぜならば、私は病院と言う者が大つきらいであるからだ。その一つの理由としては簡単に人に話せることじゃない。だが、もう一つは答えることは出来る。それは普段の生活からかけ離れた病気やけがに対し接する機会が病院だけにとどまつているからだ。

これは私の勝手な思い込みかもしれない。だがそれでも私は病院と言う存在は嫌で仕方がない。その為、今までまともな診断や治療を受けずとも、この齢30になつても私は健康体のままでいられている。それはそれだけで十分良かつたとも思つてている。そしてそもそも病院の話をしているところから、私は仕事の事をすっかり忘れていたことに気づいた。すぐに我にかえれば、同職種の人間が大掛かりなカメラやレコーダー。さらにその手に持つのは鉛筆にボロボロになつたメモ帳。もちろん私もメモ帳はしつかりと持つていた。さつそうと取り出し、その群集の中に割り込むことにする。

私、南咲洋平は近都産業新聞会社の普通の新聞記者である。

プロローグ（後書き）

決まった文字数でないので1万文字投稿から3000文字付近の投稿に換えようかと思っています。

やみ喰い～南咲洋平～（前書き）

南咲洋平 男性（32）

何処にでもいるような一般的な成人男性。ちなみに独身。両親は幼いときに一人ともすでに他界しており、養護施設で育つた。いたつて普通で、周りから観ても真面目そうな性格だが、肝が小さい。大きな壁にぶち当たると途端に尻ごみや怖気づいてしまう。時にパニックに陥る事も。その分一つの事に対しては誰よりも集中力を持ち備え、それをいち早く自分の身に入る特技はある。

さつきは何だったのか・・・。

私は強い不快感を味わないながら、来た道を戻っていた。ようやく記事のネタになつたと思つて意氣込み勇んでは、単なる道端で起きた、猫同士の喧嘩であれほど盛り上がるとは・・・。

とんだ空振りだ。

がつくりと肩を落としながら、つこさつきの自分の姿を見直して、少し恥ずかしくなる。向こうも向こうだが、自分も所詮他人から見ればとりとめのことなのだ。そう思ふと余計にやる気が落ち込んだ。

日差しは変わらぬ調子を見せている。私の体半分を焦がすようないのぞきょうだ。後頭部の産毛が妙な感触を漂わせているのを感じた。

私の調子は何処までも修正もなく傾き続けるのに、昼になつても太陽は一向に傾きを見せず、ずっと私の背中を追つていて。背中に伝わる熱が、私の気力を奪い取り、焦りを増著しているのをあの太陽は知つているのだろうか？無謀に近い想像に心半分囚われてたのにハツと気付けば、私の立ち位置は木陰の在る道路沿いに足を運ばせていた。無意識も甚だしいことだが、とりあえず目に付いた場所があつたので、私はさっそく向かう事にした。

通り沿いにあつた近くの自販機でコーヒー缶を一つ買い、少しの間一服することに。煙草はこの世代で珍しいのか、吸う事は一切ないと考えている。要は吸わないのだ。少し肩身の狭い生活を強いられたのかもしれないだろうが、私はこれが至つて普通の大人だと思っている。コーヒーを持つ手が無理矢理に喉へ押し込む。綺麗に隙間なく入り込んだ流動物は、私にある事を思い出させていた。この季節になると、もうひとつ可笑しな事が私の中でききる。それは両親の顔がすっかり忘れてしまう事だ。不思議なことと思える

だろうが、これは毎年この時期になつて起るのだ。今私は育ての親などは必要ないのだが、幼少の私だつたとすればそれは違うだろう。何故なら私の両親は、私がまだ物ごころの着く前に一人とも亡くなつていた。否、すでに亡くなつていたことを聞かされたのだ。

私が両親の死を知ったのは10歳の頃だつたと思つ。記憶が断片すぎるがその年代に近かつた。それまで私と同年代の子供達やそれよりやや下か、もつと年が上の子も沢山いた場所で、何となく暮らしていたのだろう。

児童施設

私には最初、この単語に深い意味を持つことは無かつたのだろうか。自分とおなじ子供がたくさんいることが、私にとってのそこでの幸せではなかつたのではないのだろうか？

唐突に例えばの話になつてしまえば、私は再び両親の事を思い出そうと躍起になる。だが、だめな結果に終わるのは分かつていて。探れば探るほど、そこからどうしても目の前で霞がかかつた様に記憶の断片がぼやけ、深く沈む様に無くなつていく。確かに分かる事は、両親は既にこの世にいないこと。それが分かつていながらも、私はどこかでその事実を否定しているのかも知れない。そしていつの間にか両親がいまでもどこかでひつそりと生きているような気がしてならないのも、幼い頃の面影が強く残つてゐるからだ。どちらにしろ、今の私に真実を探るすべは無い。私が生まれた土地、両親の暮らした場所も、今では幻の様に時間の流れに消え去つてしまつた。

喉に流れ込んだ冷えた黒い液体物が口で熱く火照つた体を一時的に冷ましてくれる。これもいつかは身体の熱に変化されることだが、無いよりはましだ。何も持つていらない手が、今度は顔の上へ移動した。額にじんだ汗が空になつた空き缶に伝わつてすぐにはじけたからだ。またてきた汗をぬぐおうと、手は勝手に反応した。まだ額から噴き出す汗を、手の甲で拭いながらまたハンカチが必要にな

る事を予想した。それより複数のハンカチを持つのではなく、今度は大きめのタオルでも持参しようかとも今思った。

ふと、自販機の隣には横長の茶色いベンチが静かに佇んでいるのを視線にとめる。まるで自分が座るのを今か今かと待つように、自らの存在をひしひしと私に伝えたかったのだろう。ベンチの座り場所はちょうど木陰になつていて、気持ちよさそうだった。ゆっくりと腰を据えてベンチに座り込み、少し呆ける。仕事中なのだが、今日はこれ以上日差しの下に出たくなかつたからだ。木陰のほうに佇み、風が来るのを待つ。木陰に来れば風が自然と流れるのは何故かと考えたことはあるが、どうという事でも無い。熱い日差しの下では、風が吹いても気づきもしない人の感覚らしい。外部からの刺激とは普段生活する場所より、敏感に反応する環境ではないと分からぬことを、どこかの誰かが言つていたのを聞いた記憶がある。仮にそうだとどうしても、ただ聞いただけでそれは大真面目に信じることも無い。これも一興の内として、次第に記憶の中から薄れていくのだろう。

風が吹き始めていた。もう何も動こうとはしない炎天下の中から、涼しい贈り物が来たように思えた。吹きつける風が、無造作に額に張り付いた汗を清々しいほどにさっぱり流し出してくれている。じつとりとしたワイシャツに伝わる自分の汗が、酷く気持ち悪く感じた。今日も通勤姿のままいつも通りの服装で來ていたが、今日はこれじゃなくてもよかつたのかもしない。気分転換である休憩時間も熱い季節に近づくほど、長くなつていく。仕事はきちんとこなしたいが、それほどもまでに根気詰めでない。私も所詮人の子。怠けたい時だつてあるのだから。それが今じゃなくともいい、どんな時間帯、場所でも私は普通であり続けているのだ。だから私は日つくモノに興味をすぐに持ち、すぐさまに食いついて行く。餌をねだる動物のように。私には大きな興味本位は計り知れない筈だ。

「！」

聞き慣れない高い声が聞こえた。増幅しようとして、帰つてその

増幅をしすぎたマイクとアンプの音が大きく拾われた様な胃にキリキリきそつなあの音が響いたかと思った。しかし、今耳した音はそれとはだいぶ違っていた。機械的な感覚より、もっと肉声に近いもの・・・。そう、悲鳴だった。

「ここでもまたチャンスが巡ってきたのか・・・！」

私は不謹慎な考え方を持ち合わせながら、自分の性格を改めて自己で感心していた。

だからとは言い難いが、私の耳に、女性の悲鳴が聞こえれば、私の脳内はすぐさま反応を開始して、身体にエンジンを掛ける。今まで暖めてあつた体の隅々にその伝達が通り、私の視線はすぐに上昇を果たすと、間をおかず、まして無駄もなく悲鳴の下方角へ向いた。

「なんだ・・・？」

ひとしきりの休みだつた私の瞳が瞬く様に生き返り、自ら輝いたような感じがした。私の記者としての何かの勘が働いたのかも知れない。

それは言つても私の記者人生にそのような華やかしい功績があるわけでもない。これもまた一言で普通の立場である。最良といえるポジションにいるわけでもなく、まして会社から追い出される危機感がある立場に立たされているわけでもない。そう言つた場所では確かに目立つタイミングを逃した、何とももつたひない一人でもある。だが、あの人だから悲鳴はどうしても気になつて仕方なかつたのだ。

私の他にも、その悲鳴を聞きつけ、飛び出してくる野次馬達。少なかつた黒山の人だからは見る見るうちに成長を果たし、もうすぐ私の目前まで、人の壁ができそだつた。

空き缶を片手に、私は勢いよくベンチの脇からスッと這い出した。ガタンと平衡の出でいないベンチの肢が小さく音を鳴らしたが、もう私の耳に入つてこない。視線と聴覚は常に同じところへと向かっていたからだ。

やみ喰い ～南咲洋平～（後書き）

大の大人が肝試しをする時の感覚はどんなものか想像してみました。
お化け屋敷つてどうもあの雰囲気に耐えられなくなつて走つてしま
うよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2837g/>

やみ喰い～病院～

2010年10月28日04時04分発行